



エッセイ

海外で成長する子どもの「ことば」育て

オーストラリアに移住したわたしと息子の日常から

中野 千野*

© 2017. 移動する子どもフォーラム. <http://gsjal.jp/childforum/>

1. オーストラリアへの移住

新しい生活を始めるべく、5歳になったばかりの息子の手をひき、オーストラリアにやってきました。ようやく2か月が過ぎたところである。息子も徐々にではあるがこちらの生活にも慣れてきた。これまでわたしは、日本語教育に身を置く立場ゆえ、主に教師や研究者としての立場からその成果を発表し、論文執筆をしてきた。しかしここに来て、親の立場からも考えていることや思うことを述べてみたいと思い、パソコンの前に座っている。

オーストラリアへの移住は、昨日今日で決めたわけではなく、日本語教師に転職した時からいずれはオーストラリアで生活がしたいという気持ちがあった。幸い、オーストラリアの永住資格を持つわたしたち夫婦は、オーストラリアで子育てをすることが兼ねてからの願いでもあった。仕事の都合ですぐに移住ができない夫は、息子が誕生したころから、まずはわたしと息子での移住を強く希望した。わたしも15年前に4年ほどオーストラリアで生活をしたことがあり、さまざまな言語や異なる文化背景を持つ人が共に暮らし、それらを持つことに寛容な態度で迎え入れようとする土壌に驚いたことを覚えている。その寛容的な態度とゆったりとした雰囲気と併せ持つオーストラリアは、子育てには理想的な環境のように思え、時がきたらオーストラリアで子育てをしようと考えていた。そして、そうすることが息子の、そしてわたしたち家族の人生をより豊かなものにしてくれるのではないかと考え、息子の就学年齢を機に母子で先に移住することに

* オーストラリア在住、ノースショア日本語学校教員

なったのである。

息子は、東日本大震災のあった2011年の暮れに日本で生まれ、5歳を迎えるまで日本で育った。オーストラリアへは、移住準備のために一週間程度の旅行で4～5回来ただけである。息子は去年の12月までは東京の保育園に通い、1月半ばにこちらにきた。ゆえに英語を話さないし、理解もしない。彼が3歳ぐらいの時だったのだろうか。近い将来、オーストラリアへ移住すること、学校はオーストラリアの学校に行くことを少しずつ話し、心の準備をさせてはきたものの、まだ幼い息子にとってオーストラリアへの移住は「旅行」に行くような感覚だったのだろう。こちらに住むことをいつも嬉しそうに、自慢げに保育園の先生やまわりの友達、近所のおじさん、おばさんに話していた姿を思い出す。

そんな息子の表情に陰りが出始めたのは、来豪後一週間たって夫が仕事のために東京へ帰ったところからである。そのきっかけは、わたしたちの住むマンションのボヤ騒ぎに始まった。わたしたちは、駅前にあるマンションの高層階に住んでいる。このあたりは、高層マンションが立ち並び、目覚ましい勢いで開発が進んでいる。15年前、日本語教師としてオーストラリアに住んでいたわたしは、このあたりの企業に週に一度、教えに来ていたが、当時はオフィスビルが少しあるだけだった。ところが今は様変わりしている。

夫が日本に戻った翌日の深夜、けたたましいファイヤーアラームの音に飛び起きたわたしは、どうせ誰かが間違えて押ししてしまったのだろうと呑気に構え、あたりの様子を窺おうとドアを開けた。すると、エレベーターホールには焦げ付くような臭いが立ち込めており、燻る煙のせいで目を開いているのも辛くなるほどだった。当直のコンシェルジュも「逃げろ、逃げろ」と叫びながら、ドアをたたいて回っている。これはまずいと思い、寝入っていた息子をたたき起こし、寝ぼけた息子の口にハンカチを当て、着の身着のまま、パスポートと財布の入ったバッグをたすき掛けにし、非常階段から降りた。とはいえ、わたしが住む階は20階である。幼子連れて降りるのも容易ではない。後ろからも人が続く。皆、着の身着のままである。貴重品の入ったバックを手を逃げる中国から移民してきたという老夫婦、何も持たずに逃げるTシャツ、短パン姿の西洋系の顔立ちの男性、携帯だけ持って降りるアジア系の年配の女性などさまざまである。シャワーを浴びていたのか髪がまだ濡れたままの若いアジア系の女性もいる。夜中の1時過ぎに、皆、行列になって一心不乱に階下を目指す。脳裏には米国の9.11の映像が浮かび、不安が増してきた。5歳の息子はまだ寝ぼけたままである。息子を抱きかかえて逃げればはやいのだろうが、息子はすでに20キロ近くあり、抱きかかえること自体、無理であった。とにかく息子に「はやく歩いて」、「逃げないと死んじゃうんだよ」などと半ば泣きそうになりながら叫び、歩かせるしかなかった。やっとの思いでマンション前の広場に出た時には、何台もの消防車が来ていた。誰からもこれといった説明はなく、マンションの住人同士で何が起こったのかを想像しあうしかなかった。わたしたちは、訳も分らず夜中に外で待たされ、一時間ほどして、ようやく部屋に戻ることが許された。その際に、わたしの斜め向かいの部屋に住む若者が起こしたボヤが原因だったと知らされた。無事に生きられたことに感謝しつつも腹が立つやらで、複雑な思いが沸きあがって

来た。と同時に改めて高層階に住む恐怖で震えた。この時のわたしの強い不安やまわりの緊迫した雰囲気が息子にも伝わったのだろう。次の日からしばらくは、ベッドに入るとき、「ママ、きょうはファイヤーアラーム、鳴らない？ましゅくん、やっぱり日本がいいな」という日が続いた。息子は、日本ならばこんなことは経験しなくても済む、あるいは父親がいればもっと心強いと感じたのだろう。

あのボヤ騒ぎの夜を境に、息子は、保育園のお友達がくれた「思い出集」やアルバムを一人でめくり、日本から持参した日本語のDVDをしばしば見るようになった。そして、とうとうあふれる思いを抑えきれなくなったのか、いつものようにベッドに入った後、「ママ、ましゅくんはね、本当はね、「エルマーの冒険」が終わるまで日本にいたかったんだよう。ましゅくん、本当はね、保育園、好きだったんだよ」と涙声でポツリポツリと言った。そして、「ましゅくんは、日本語、絶対に忘れない、パパも忘れないでって、言ったから。英語は忘れる」とつぶやいた。これらの息子のことばは、さすがにわたしの胸に響いた。息子は2月に保育園で開催される劇「エルマーの冒険」に出る予定だった。オーストラリアでのボヤ騒ぎの経験は、彼の英語へのまなざしにも影響を与えていた。彼にとっての英語はまだ覚える前から、忘れることが前提となっていた。わたしとしては、いろいろなことが起きることは覚悟の上での母子移住生活であったが、この時ばかりは出鼻を挫かれ、すっかり意気消沈してしまった。この息子のことばは、改めて親の一存で、なぜ子どもを移住させたのかということへの覚悟を問われているようだった。

2. 息子の学校生活

息子の一日のメインは、学校生活である。学校が車で片道40分もかかるため、朝6時前には起きなければ間に合わない。息子は、まだ英語をよく理解しないし、話さない。わたしは日本語教師という仕事柄、親に連れられ、来日した子どもの日本語指導に携わってきた。そのため、子どもたちが必死に日本語と向き合い、さまざまな葛藤の毎日を乗り越えながら習得していく様子を目の当たりしてきた。日本語がわからないまま、日本の学校生活を始めるということは、いわば泳げない子どもをいきなりプールに入れるようなものである¹。今ではこのような子どもたちのために、日本語指導や「母語」での学習支援なども行われ、言語習得への負担や文化に対する配慮も見られるようになってきた。経験上、子どもたちは半年もすれば、ある程度の日常会話を理解したり、少しずつ話したりする。そのためか、周りの大人たちは「やっぱり子どもは（言語習得が）はやいよね」と口にする。しかしその陰で、子どもたちがどんな思いで学校生活を送り、日本語を習得しているのかが語られることは少ない。子どもたちは、日本語を理解しなかったり、話さないために一人で休み時間を過ごすことが多かったり、沈黙の日々が続いたりする。子ども

1 言語習得研究では減産的バイリンガリズムとして捉えられ、サブマージョンと呼ばれる。

によっては日本語指導の間、机の下に隠れようとしたり、あるいは友達との喧嘩に発展したり、チック症など、体調に現れたりする子どももいる。子どもたちは、そういったさまざまなことと葛藤しながら日本語を習得しているのである。子どもにとっても異なる言語や文化を習得していくことは、決して容易いものではない。だからこそ、わたしたち実践者は、子どもにできる限り寄り添いたいと願い、手探りしながらかれらの日本語習得を支援していくのである。

そのようなわたしの経験もあり、オーストラリアでの息子の学校生活はソフトランディングさせたかった。そのため、すぐに現地校という選択ではなく、あえて日本人学校に入れた。

その日本人学校は、とてもユニークな方式をとっている。日本の文部科学省の学習指導要領に準拠し、授業が展開する「日本人学級」とオーストラリアのニューサウスウェールズ（以下、NSW とする）州の「学習指導要領」に準拠し、授業が展開する「国際学級」がある。「日本人学級」には、小学部と中学部があり、主に親の駐在で来ている子どもが在籍している。「日本人学級」では、帰国後に配慮し「日本の小学校・中学校と同等の教育」を提供しつつ、毎日一コマずつ英語を学ぶカリキュラムとなっている。他方、「国際学級」は、現地の子どもたち向けの学級で「NSW 州小学校と同等の教育」を提供し、毎日一コマずつ日本語を学ぶことになっている。そのほか、体育、図工、音楽などの教科や遠足、運動会などの学校行事は両学級合同で行われる。

オーストラリアの学校制度では、NSW 州の場合、5歳の準備教育（キンダーガーデン）から始まる。通称キンディー（以下、キンディーとする）と呼ばれる課程である。キンディーの役割としては、Year1 から始まる初等教育への橋渡しの課程だといえるだろう。読み書き、算数などとともに、楽しく学校生活というものに慣れていくことを狙いとしている。

息子はこのキンディー課程に在籍する。キンディーには現在 15 名前後の子どもが在籍するが、とりわけ息子のクラスは、多様な背景を持つ子どもたちが集まっている。日本からの駐在の子どものというよりは、どちらかが日本出身である親を持つ子どもがほとんどである。なかには日本や日本語と直接的なつながりを持たない親を持つ子どももいる。日本語をメインとして話す子どもは、親の駐在で来ている子どもと息子の二人だけである。クラスメートのほとんどは英語に強い子どもで、程度の差はあれ、日本語と英語、あるいは中国語など親の「母語」と英語の両方を理解し、話す。息子と反対で、英語のみを話す子どももいる。親の背景も多様である。日本出身の親のみならず、英語を「母語」としない親がほとんどで、たとえ英語が「母語」であっても、オーストラリア以外の出身の親もいる。日本出身の親も、比較的海外生活が長い親が多い。

その一方で、初等、中等教育の「日本人学級」の子どもたちの中には、駐在員の子どもの多く含まれるが、生まれてから一度も日本で暮らしたことがない、国から国へとスライドする中で成長している子どもも少なくない。このように昨今の移動の時代においては、「日本人学校」は、もはや国籍や人種で捉えられるものではなく、ここでの「日本人」とは何かといった議論は欠かせないが、それは別稿に譲る。

話を戻すと、息子はそのようなカリキュラムの中で学んでおり、これまで育んできた日本語をたよりに、オーストラリアでの日々の生活を営んでいる。幸いにもクラスメートのほとんどが日

本語を理解したり話したりするので、息子はことばによる不自由をあまり感じていないように思われた。たとえば、あるトピックについて持参してきたものなどを使い、クラスメートの前で説明する“Show and Tell”などの活動では、質疑応答の場面で、日本語を話すクラスメートが（英語がわからない息子のために）日本語で聞いてくれるらしい。担任教師も日本に住んだ経験を持ち、多少の日本語を理解する。遊び時間には友達と日本語で話し、一緒に遊んでいるとのことで、息子も学校生活は「楽しい」という。

とはいえ、「国際学級」の授業言語は基本的に英語である。先日行われた個人面談では、担任の先生に、（息子は来豪して）まだ二か月なので長い目で見ていく必要があるが、英語の習得が少しゆっくりなので、家庭でもフォローしたほうがよいとの助言を受けた。確かにオーストラリアに住んではいるものの、授業の英語以外、息子が英語に触れる機会は決して多いとはいえない。帰宅後、現地の子ども向けのテレビを見る、宿題をする、わたしがお店の人や先生方と話す英語を聞く、くらいである。ところが問題はそれではなく、フォニックスの習得を指しているらしかった。キンディー課程で力を入れていることの一つにフォニックスがある。フォニックスとは、音と文字の結びつきのルールを指し、主に英語圏の子どもたちの読み書きの導入に使われているものである。たとえば、Bは「ビー」ではなく「ブツ」と発音する。このルールを覚えていくと、知らない単語でも推測して発音し読めるようになる、単語のスペルが覚えやすくなるなどのメリットがあるそうだ。授業で学ぶ以外には、宿題として「Speedy Words」というハンドアウトが渡され、フォニックスの練習を行う。フォニックスを使って次から次へと発音していくというもので、並んだ単語自体にほとんど意味はない。わたしはこれが苦手である。自身もこの方法で学んだ経験がない上、この練習自体に意味が見出せないからである。何の文脈もないところに、発音するだけの意味のない単語が30個ほど並べられており、息子にとっては目で見えて暗記するようなものである。息子もこの宿題をととても嫌がる。おそらくこの方法は、英語環境で育った子どもであれば、今まで耳で聞いていたことばを文字に置き換えて自分で読めるという喜びがあるのだろう。しかし、息子の場合は馴染みのない音や文字ばかりで、そもそものベースが異なる。そのため、息子がそこに意味が見出せないのは頷ける。

加えてもう一冊、「Sight Words」というハンドアウトがある。こちらは、前者に比べればまだわかりやすいが、これも正直得意ではない。ハンドアウトは、「Red Words」「Blue Words」など12色のグループに分けられていて、頻出順位が高いと思われる単語が並んでいる。例えば「a」や「and」、「the」などである。一目見た時に、すぐに拾って読む力につなげていこうとするものである。色によって量は異なるが、1ページ当たり10個から20個ほどの語が並ぶ。キンディーの子どもたちは、これらのハンドアウトをもとに、ページごとに担任教師が指した語を自分で読む（発音する）というテストを受ける。合格すれば次の頁に進むことが許される。テストの時期は、自身で「できる」と思う時期に申し出ることになっているが、息子はまだ一回しかパスしていない。しかも自信がないのか、いつまでたっても「(テストが)できる」とは言わない。それらを助ける教材として、インターネットの動画やサイトにアクセスして行うゲーム形式のクイズな

どがある。ゲーム形式のクイズは、段階ごとにどこまで達成しているかが教師も把握できるシステムとなっている。

これらのほかに毎日持って帰ってくる多読用の小さな絵本が2冊ある。内容把握もあるが、「Sight Words」を絵本の中から探し出すことが求められている。今は、わたしと息子で試行錯誤しながらやっている段階である。親としても息子に合うもったいい方法がないかと先生に相談し、違うサイトを送ってもらったり、息子と街で看板から「Sight Words」を見つける練習をしたり、フォニックスを使って街中の文字を読んだりするなどの実践を重ねている。このことを息子のクラスメートのおかあさんに相談すると、フォニックスが得意というご主人を息子さんと一緒に我が家によこしてくれたこともある。そのような毎日を過ごしながら、わたしと息子は英語に向き合い、学校生活を生きている。

3. 子どもははやいから大丈夫ですよ

息子の英語習得には呑気に構えていたわたしも、クラスメートのおとうさん、おかあさんたちから、「Speedy Words」の何ページまでパスしたという話を度々耳にすると、さすがに焦りにも似た気持ちが出てきた。というのも、最近になって担任教師から、息子がクラスで一人だけ作業が終わらず、泣いたという話を聞いたからである。息子は、わたしに気を使っているのか、学校のことを聞いても「楽しい」としか言わない。後になってなぜ泣いたのかを息子にやんわりと聞いてみた。すると、英語がよくわからなかったから、始めるのが遅くなって作業が終わらなかったという。息子にとってその作業は簡単に出来ることであったが、英語の壁でできなかった。息子は、そのことがよほど悔しかっただろう。泣くという手段で訴えたようだ。

息子は、5歳児にしては体格に恵まれ、体力もある。少しでも英語習得の助けになったり、なにかしらの自信につながればよいかと思い、水泳と空手を始めた。水泳は、日本でも1歳の時から習っていた。息子に喘息があったので小児科医に勧められてのことだった。本人も水泳は大好きなようで自ら進んで行こうとする。日本では、地元（東京）のラグビーチームの幼児部に入っていた。夫が学生時代にラグビーをやっていたので、息子にも習わせたかったのだろう。毎週日曜日の朝に連れて行っていた。そこで、こちらでもラグビーチームに入れようかと考えたが、練習時間が平日の4時からで、学校が遠い息子には時間が合わなかった。そのためラグビーは諦め、キンディーの友達と一緒に空手を始めることになった。水泳も空手の教室も、オーストラリアの土壌が影響してか、英語がわからない息子のためにとわざわざ日本語を話すコーチをつけてくれた。息子は、わたしの英語習得への焦りを尻目に、楽しく習い事に通っている。

親としては、担任教師からの助言もあり、息子の英語をどのようにサポートすればよいのかを迷うようになった。家では、これまでの日本の生活と変わらず、日本語で話したり書いたりしている。わたしが英語を話そうものなら「ママは英語を話す人じゃない」と手で口を押さえられる

始末である。わたしにとっても日本語を話すことが自然なので、夜寝る前の読み聞かせもすべて日本語である。わたしたち家族は、子どもをこちらで育てる覚悟で移住したし、これからも息子はオーストラリアをメインに生活をしていこう。そう考えた時に、ここでの共通言語が英語である以上、現実に鑑みれば英語の習得は必須である。担任教師としても、その立場から英語の習得を勧めざるを得ないだろう。このままの状態では、息子の英語への苦労はいつまでたっても続くのかと思われてきて、ローカルの友人や知人、おかあさん、おとうさん友達の意見も聞いてみた。そのようなときに決まって返ってくることばは、「子どもははやいから大丈夫ですよ」である。このことばは実に「マジックワード」である。その一言で、すべて解決したかのように一瞬安心するのである。しかし、現実がそう容易くないことは、息子の日常からも、日本語教師である自分の経験からも、本当はわたし自身が一番よく分かっているのである。

そのような葛藤もあり、先日、こちらにきて初めて、バイリンガル子育てに関する研究会に参加した。言語教育関係者とオーストラリアで子育て真只中の日系の親たちが集まり、ディスカッションするというものであった。わたしには、発表そのものというより、質疑応答の時間に寄せられる親たちからの質問や悩みに対して、パネリストの先生方のオーストラリアでの子育ての経験談がとて心響いた。わたしが思うに、子どもは一人ひとり違う。だからこそ、答えがない分、親も手探り状態で不安が募るのだろう。研究結果から導き出された数字を見ると多くの親たちは安心する。しかしその一方で、数字に引っ張られて、その基準からはずれると、不安を訴え、涙ぐむ親もいた。数字は両刃の剣であることを親たちの話を聞きながら改めて感じた。そのディスカッションの場は、だれかの子育ての話であったかもしれないが、すべてが自分の子どもに当てはまらなくとも、ある部分では共感できたり、自身の経験を振り返ることで新たな考えがでてきたりする場でもあった。その場で、だれかに話し共有することは、わたしも含め、多くの親たちにとっては、癒されたり、安心につながったりする過程であったように思う。なぜなら、その場の参加者一人ひとりが、海外で子どもを、そして「ことば」を育てるといって、長期的で答えのない実践に手探りで挑んでいる同志のように感じたからである。そうであるならば、教師や研究者が学会や研究会で発表したり議論したりするだけではなく、海外で子育て真只中の親たちとともに集まり、経験を語り合うこともとても大切なことのように思えてきた。「子どもははやいから大丈夫」ではない。そんなマジックはどこにも存在しないのである。だとすれば、今のこの葛藤はおそらく長く続くことを意味する。だからこそ、いま・ここを生きる親子を中心とした「ことば」育てを考える場がもっともあっていい。

オーストラリアでの生活を選択したわたしたち家族の場合であれば、これから始まる息子の学校生活にとって、ひいては彼の人生にとってよいのはなんだろう、ここでの「よい」とはなんだろう、いっそのこと Year 1 から現地校に入れた方が英語に慣れるのか、それともこのまま長い目で見守っていけばよいのか、オーストラリアにあっても「母語」である日本語を育てれば、彼の「ことば」は育まれるのか。わたしは、いったいこの先どうすればよいのか、親としての悩みは尽きることがない。

4. 息子の日本語の位置づけ

わたしは、この4月から補習授業校（以下、補習校とする）で学級担任をすることになっている。そのため毎週土曜日は、いろいろなクラスを見学したり、先生方と打ち合わせをしたりという時間を過ごしている。その間、息子は、同じ補習校のうさぎ組（年中組）で「日本語」を勉強している。二か月前に来たばかりの息子は、日本語がよくでき、本人も積極的に参加しているらしい（担任教師談）。在籍学級では、英語ができないために作業が終わらず泣いている息子も、ここでは先生からの質問にほかのだれよりも先に答えることができ、カルタ取りゲームでは勝つことができる。そういった一つひとつが嬉しいようで、毎週張り切って通っている。当初わたしは、息子が土曜日まで学校に行くことを嫌がるかと思ったが、結果はむしろ逆だった。「ましゅくん、土曜校だーいすきなんだ〜」と言っているくらいである。補習校が、日本から来た息子の居場所となり、「支え」となるとは思いつかなかった。息子にとって補習校は、日本語を維持したり、学んだりするためだけの場所ではなく、異なる言語や文化に触れることで生じる<疲れや不安>という荷物を下すプラットフォームの役割を担う場のようなものである。この感覚は、おそらく前節で触れたわたしが研究会に出向き、親たちや言語教育関係者と子育てや「ことば」育てについて語り合う場での感覚とも重なるように思う。息子は、覚えてたのひらがなを駆使して、補習校の図書カードの裏に書いてある「50冊借りると景品がもらえます」という一文を励みに、毎週3冊から5冊ずつ、日本語の絵本やDVDをせっせと借りてきている。そして自分で見たり、読んだりして、彼なりの「補習校」を楽しんでいるようである。

「日本人学校」でも毎日一コマは「日本語」の授業があるが、そこでもよくできるのが唯一の励みとなっており、「日本語」の授業や補習校に参加することは、彼の存在意識や自己肯定観を育む場となっているようである。そこでの「日本語」は、紛れもなく彼を「支えることば」であり、息子はその「支えることば」をさらに育みつつあるようだ。

例のボヤ騒ぎの一件があって、息子が保育園のアルバムを見ながら、突然、「Tちゃん（保育園時代に仲良かった男児の友達:仮名）、ましゅくんのこと、きっと忘れるよ。そしたら、ましゅくん、ほんとに悲しいんだよ」と泣いたときがあった。それを後日、ソーシャルネットワークサービス（以下、SNSとする）でTちゃんのおかあさんに伝えたら、Tちゃんも覚えてたのひらがなとカタカナ、時になんと英語も交えて手紙を書いて送ってきてくれるようになった。Tちゃんも、日本で、英語のアフタースクールに通っているために英語を使ってみたかったのかもしれない。いまでは、月2回ほどのペースで文通が続いている。文通をしていると、時々会いたい気持ち募るのか、顔が見たいというのでSNSのカメラ付き無料通話で話すようになった。そこでの「日本語」は、時空を超えて、仲良かったTちゃんとの関係を「支えることば」となり、「日本語」は、息子にとってなくてはならない大事な「ことば」となっているようである。そして補習校や日本語の授業に参加することを振り返ってか、突然「ましゅくんはね、日本語どんどん上手になってるんだよ」と嬉しそうに話す。この振り返りにはわたしも驚いたが、彼にとって

の「日本語」はますます彼を「支えることば」となっており、とても大事なものとして育てているようである。

5. 見えてきた新たな課題

わたしが日本語教師に転職してよかったと思ったことの一つに、息子のことばの変化に早く気がついてあげられたことが挙げられる。

息子が文として話し始めたのは2歳半過ぎてからだった。その後3歳になると息子の会話力は飛躍的に伸び、親子で会話を楽しめるまでになった。しかし一つ気になることがあった。4歳になってもカ行とタ行とサ行の音がはっきりせず、混濁が見られたからである。日本語教師になるときに勉強した音声学の調音の知識もあってか、息子が発音する際の舌の位置が違って思うように思えた。そのために聞き手であるわたしが聞き取りづらく、いらいらしてしまうことが度々あった。たとえば、息子は「さめ」について話しているのだが、わたしには「かめ」にしか聞こえず、彼の意味する単語や意味にたどり着くまでにかなりの時間を要するのである。それでも彼の意味するところまでたどり着ければよいのだが、たどり着けないこともある。5歳になった今でこそ、ようやく言い換えや絵を指したり、「あいうえお表」を使ったりと別の手段で表すようになってきたが、その当時は単語を繰り返すだけだった。息子は、自分の話が伝わらないとひどく落胆し、泣いたり怒ったりする。小さいうちは、(決していい方法とは思えないが)トピックを変えることで、彼の気持ちをなだめたりしていたが、最近ではそれも通用しない。自分の伝えたいことが相手に伝わっていないのがわかるのである。しかも息子は、自身の発音によるものとは思っていないので、わたしが(聞き手側)「人のお話をよく聞いていないからだよ!!」という。多少の音の混濁なら見守るところだが、コミュニケーションに支障をきたしているとしたら、もはや看過することはできないだろう。何度か発音させてはみるものの、先の例でいえば、やはり「かめ」としか聞こえないのである。保育園の担任もこのことに気がついていて、担任の話によれば、息子は保育園でも、友達に何度も聞き返されると、読めたりわかったりしていてもわざと話さなくなったこともあるそうだ。担任からは、就学前の子どもの発達においては、「せんせい」を「てんてい」と発音したり、「疲れた」を「ちゆかれた」と幼児語で発音したりする子どもも多いため、「もうしばらくは様子を見ましょう」と助言を受け、経過観察のままこちらへ来てしまった。しかし5歳を迎えた今も続いているということは、やはりなんらかの手当てをした方がよいかと思われ、就学を機に学級担任に相談した。すると学級担任も気がついており、学校と提携のある日本語ができる speech pathologist (言語聴覚士)を紹介してくれた。オーストラリアでは、speech pathologist が直接家にきて指導をするということだった。学級担任やまわりの親たちの話によれば、オーストラリアでは speech pathologist をつけることはよくあることで、決して珍しいことではないらしい。わたしはそのことを聞いて正直ほっとした。

先日、その speech pathologist が我が家にやってきた。原因を探るアセスメントを行うためである。その結果、やはり、カ行とサ行とタ行の音の間で代替が見られるということだった。幸い、息子の場合は「構音の代替え発音のみなので、あえて日本語で診断をつけるなら、「発達性構音遅延」(報告書の原文ママ)ということであった。つまり、発音する器官に特に問題がないにもかかわらず、なぜか発音(構音)の仕方を誤って覚えてしまっているということだった。原因はわかっていない。就学前の幼児にはよく見られ、日本では幼児語として見過ごされがちで、後になって問題となるケースが多いそうである。成長するにつれて自然と治る子どももいれば、後々にまで残る子どももいるため、できるだけ早い段階で専門家について訓練することが望ましいということだった。今のところ、息子は日本語では顕著な症状が見られるが、覚えてたの英語に関しては、フォニックスのおかげもあるのか、目立った混濁は見られない。5月からはその指導も始まり、親子で挑むことになる。

息子の「発達性構音遅延」が日本ではなく、オーストラリアで明らかになったというのはとても興味深い。それは、学級担任が日本語のわかる先生であったこと、日本語の「発達性構音遅延」の訓練ができる speech pathologist がいたこと、この分野の研究が日本よりもオーストラリアのほうが進んでいる(speech pathologist の先生談)ことなど、数々の幸運に恵まれたことが大きいといえるだろう。どのような実践が展開されるのか期待されるところである。わたしは、恥ずかしながら、「ことばの教育」に携わっているにもかかわらず、「構音」に問題を抱える子どもの存在自体を知らなかった。息子のおかげで、日本語を「母語」とする子どもであっても、だれもが日本語の発音を自然習得するわけではないこと、発音指導を受けなければ聞き手に通じる発音ができない子どももいることを知ることができた。この経験は、わたしが教師として、これからもさまざまな背景を持つ子どもたちの「ことば」を支えていく上では、とても重要である。なぜなら、発音の問題を「母語」の干渉によるものと捉えるのか、息子のように「発達性構音遅延」の可能性と捉えるのか、あるいはほかに原因を探るのかなど、わたしの「ことばの教育」に対する姿勢を育んでくれたように思うからである。そして今回の件で、わたしが何より有難く思うことは、息子の「発達性構音遅延」ということに対して、多くのおかあさん方や先生方が理解を示し、speech pathologist をつけることそのものを決して特別ではなく、よくあることだという認識を持って息子に接し、見守ってくださることにある。

6. 海外で成長する子どもの「ことば」を育てる

ここまで、親の目線で感じるままに、オーストラリアに移住してきたからの息子との日常を描いてきた。

最近の息子はというと、変わらず日本語を大切に育てている最中のようなのである。その一方で変化も見られる。息子は気が向くと日本から持ってきたワークブックを自分でやっている。そのワー

クブックのトップには必ず名前と日にちを書く欄が設けてあるが、そこに書く名前を「まし WeE ~!」とか「まし eW」(原文ママ)と書くようになった。ひらがなとアルファベットを混ぜて書くようになったのである。「どっちかで書いたほうが見た人がわかりやすいんじゃないの?」という「いいんだよ、みんなわかるんだから」という。この場合の「みんな」がだれを指すのかよくわからないが、周りのほとんどがこの混ぜこぜの語を理解していると思うようだ。ちなみに、学校のプリントにはどう書いているのだろうかと見てみると、先生の指導もあるのか、大文字小文字は混ぜこぜだがアルファベットのみで書かれていたりする。おそらく彼の中では、日本語を「支えることば」としながらも、英語や日本語が入り乱れ、いまはまさに「まし WeE ~!」とか「まし eW」という状態なのだろう。それが今の彼にとっての「ことば」なのかもしれない。

子育てとは、まさに子どもと一緒に「ことば」を育てていく過程である。それは単言語の環境であろうと複数の言語に囲まれて育つ環境であろうと共通した部分であるかもしれない。しかし、息子のように、「海外」というアウェー感の中で、彼の周りに広がるさまざまな言語と向き合いながら生活する環境の場合は、より取り組むべき課題は増える。たとえば、これまで育んできた言語をどうするのか、新しく覚える言語はどう育て、どのように自分の「ことば」として育てていくのか、その場合の「ことば」はどう捉えればよいのかといった具合に、である。極端な話、先述した名前の表記にしても、混ぜこぜの表記であっても息子の「ことば」として捉え見守っていくのか、そんな「ことば」は社会では通用しないし学校でも評価されないのだから、どちらかの表記に統一するように注意するのかなど、子育てのし方そのものも変わってくるからである。

今回、このエッセイを書くにあたり、5歳の息子の承諾を得たわけではない。ここに親としての立場から一方的に描いてしまうことへの功罪がある。その功罪は、わたしが一生背負っていくとして、それ以上に、息子の「ことば」の教育に携わる親として、「ことば」育てのいま・この葛藤や喜びを息子と分かち合って生きていきたいと思っているし、「ことば」を通じた息子との日常も記録として残しておきたかった。そして、そのことを家族ではない、ほかのだれかとも共有したかったのである。それは、先述した研究会でも経験したように、このエッセイがわたしと息子の経験談であっても、どこかに共感したり、あるいは読まれた方がいろいろな立場からコメントをくださったりするかもしれないからだ。そのようなつながりから、新たな「ことば」の物語が生まれるとしたら、その喜びの方がはるかに大きいと思えたからである。それは、息子の将来をもっと豊かにしてくれるかもしれないし、逆にわたしたち親子の経験がほかのだれかの役に立つこともあるかもしれない。そのような新たな「ことば」を巡る物語をわたし自身も期待し、紡ぎだしたくて、親の思いから書いてしまった。この葛藤も含めて、「海外」というアウェー感の中で、さまざまな言語や文化に触れながら成長する子どもを育てるということは、子どもの周りに存在するさまざまな言語や文化とどのように向き合い、向き合った先に「ことば」としてどのように紡ぎ出されていくのかを想像しながら、一つひとつ子どもとともに模索し続けることのように思う。この「ことば」育てという実践は、わたしたち親子にとってはまだまだ始まったばかりである。今後この実践が、息子とともにどのような物語を紡ぎ出していくのかは、今はまだ知

る由もない。この後の物語はまた別の機会に共有したい。